

センサー

夢遊星人

センサー（検閲官）

くるえるストーリーズ

センサー
—検閲官—

夢遊星人 作

(1)

——お待たせしました。今週の「これが特種だ!」は、世にも不思議な前世の記憶を持つ、小学生の登場です。この少年は、まだ七才ですが、なんと自分が生まれる前には、ある男性であったことを覚えているというのです。不思議なことですねえ、ねえ、ワカ子さん。

——アシスタントのワカ子です。ほんとねえ、そんな不思議なことが世の中にあっていいのかしら。

——それがあつたんですよ。これからおいおいにご紹介しますが、問題の少年は、S県のO市に住んでいます。名前は零場勝一郎君といい、小学校の一年生です。勝一郎君は、ご両親と、お婆さんと、小学生のお姉さんと、五人家族です。家族の中で、前世を覚えているのは、勝一郎君だけです。ねえ、ワツ子ちゃん、あんた前世って思い出せる。

——全然。あたしお脳が弱いから、記憶力からきしダメ。

——あなただけではありません。普通の人には、生まれる前のことは思い出せないんですよ。

——あらそう。じゃあたし安心した。

——安心してはいけませんよ。これから、世にも不思議な世界が始まるんですからね。では、フィルムを見る前に、こちらをどうぞ。

——スポンサーに、アツカンメー!

——さて、スタッフは、S県O市の勝一郎君の家を訪れました。

ガラガラ——玄関の戸を開ける。

「ごめん下さい」

「はい、零場ですが・・・」

「UFOテレビですが、あの勝一郎君はいらっしゃいますか」

「はい、こちらへどうぞ・・・」

打ち合わせ通り、茶の間に上がりこむ。掘りごたつを囲んで、左から母親、勝一郎、お婆さん、姉の順。こたつ板の上に、ミカンを盛った盆。

挨拶のあとで、インタビュアーが尋ねる。

「勝一郎君、君が前世を思い出したのはいつ頃のこと」

「・・・・・・・・」

うつむいて含羞（はにか）んでいる。母親ひじでつく。なおはにかむ。お婆さんが手を伸ばして、髪をなでる。

「勝ちゃん、お婆に話した通りに、話せばいいんだからね」

勝一郎、顔を上げる。挑戦的な眼差しで、インタビュアーをにらむ。

「勝一郎君ねえ。君が生まれる前はなんだったの」

「男・・・」

「どんな男」

「おっきい・・・」

「名前覚えてる」

「覚えてる」

「何ていうの」

「・・・・・・・・」

「サイゾウだったでしょう」

「すみません、お母さんはちょっとご遠慮下さい。ええと、それでね、勝一郎君、サイゾウは、何サイゾウというの」

「スキサイゾウ」

「スキ・・・どういう漢字を当てるのかな」

「・・・・・・・・」

「ではね、勝一郎君。君は生まれる前は、スキサイゾウという男だった。この人について、君の知っていることについて、何でもいいから話してほしいんだ」

勝一郎、サイゾウとかスキサイゾウとか言われるたびに、肩をぴくぴくさせていたが、

「ボクのこと・・・」

「君が生まれる前の、スキサイゾウ君について」

勝一郎、首を傾げていたが、

「何でも知ってる」

急に顔をもたげ、妙に大人びた、挑戦的な眼差しを、再び見せる。

「ではね、君は生まれる前はどこに住んでたの」

「大阪」

「大阪のどこ」

「ハナテン」

「家のあった場所分かる」

母親、用意した地図をすっと出す。

「これが勝一郎の画いた地図です」

アップ。たどたどしい図面。学校と駅を目じるしに、家の位置が記されている。

「さて、勝一郎君ねえ、いや、スキサイゾウ君と呼んでいいのかな・・・」

勝一郎、肩をピクリとさせる。

「君は大阪ではどういう生活をしていたの。たとえば、お父さん、お母さんとか・・・」

「父ちゃんも、母ちゃんもいた。父ちゃんは、スキキュウゾウちゅうの。母ちゃんは、スキタエいうんや。弟が一人いた。それから、そいから、・・・子供・・・」

「えっ、子供もいるの・・・」

勝一郎、うつむく。

「そうか、勝一郎君は、前世は大人にまでなったんだね」

勝一郎、急に顔を上げる。子供らしからぬ笑いを、唇の端にニタリと浮かべて、

「ボク、子供の作り方知ってるよ」

「勝一郎君ね、前世では、君は大人になってどんなことをしていたの」

「大工」

「それで結婚したわけだよね」

「・・・・・・・・」

「結婚ということ、分からないかな」

「カカアめ、このテレビ見ていやがったら、どない顔するか・・・」

「えっ？ なんて言ったの」

「・・・・・・・・」

「勝一郎君ね、君は生まれる前はスキサイゾウであったんだけど、生まれ変わったんだから、スキサイゾウは死んでなきゃいけないよね。その時のこと、覚えてるかな」

「・・・死んでも忘れない」

「えっ？」

「この子は時々変なことを言うんですよ」

母親がせい一杯の笑顔を見せて、口を挟んだ。

「でも、変といえば、みんな変よ」

カメラが一向に向かわないのでふくれていた、小学五年生の姉が、とがった声を出す。

「あたし、もう勝ちちゃんと一緒の部屋に寝るのいや。あたしテレビの前の全国の人に宣言しておきますからね」

ふいと立って、茶の間を出る。

(2)

「スキサイゾウ君が死んだ時は、どういうふうだったの」

「寝てた」

「病気だったの」

「うん、怪我した」

「ああ、大工さんだからね、怪我をして寝ていたわけなんだ」

「そう・・・」

「それはいくつぐらいの時」

「二十五歳」

「その年齢で、前世の君は死んだの」

「そう、でも怪我でじゃないよ」

「じゃ、なんで死んだの」

「……………」

勝一郎うつむく。家族にも緊張が流れる。

「そのことは、わたしたちにも話したがないんです」

お婆さんが言う。

「じゃ、死んでからのこと覚えてる」

「覚えてる」

「本当？ どういうふうだった」

「生きてる時と変わらない。白鬚の、知らないお爺さんに連れられてった。歩いてるうちに、雲が出てきて、お爺さんが見えなくなった。雲の中に、丸い白いものが、たくさん見えるの。みんなコロコロ、坂道を転がってったよ。ボクもマリになって、コロコロ転がった。周りを見ると、顔が浮かんでるの。たくさん、たくさん、みんなコロコロ回っていたよ。

そいで、坂の下につくと、みんな列に並んだの。坂の下につくと、みんな顔がなくなってた。ボクだけ、顔があったよ。みんなどこへ行っちゃたんだろうって、ボク、さびしかったよ。周りにはふわふわした、ワタのような丸いものばかり。たくさんあったのが、だんだんへってったの。最後にボク一人になって、ふわふわこの家へ飛んできたの。

そいで、お母ちゃんのお腹の中に入ったの。生まれる時まで、みんな覚えてるよ。ボク出たくなかったけど、むりやりお腹をさかれて、出されてしまったの」

「オホホ、この子の時は帝王切開でしたの」

母親がコメントした。

「すると、生まれてきた時の勝一郎君は、前世の時のままの勝一郎君だったのかな」

「……………」

「つまりね、生まれた時の君は、サイゾウ君だったの」

「……よく分からない」

「それじゃあ、君がそういうことを思い出したのは、何才ぐらいの時」

「幼稚園の前から」

「わたしらに話したのは、小学校へ上がってからです」

お婆さんは、勝一郎の頭をなでながら言う。

「この姉のヤス子が、その前から知ってたみたいですが。ほーい、ヤス子、引っこんでねえで、出てこねえか」

ぴよこんと、バネ仕掛けのように、姉、障子の陰から姿を現わす。

「まだ勝ちゃんのことか」

「アホ、この番組は勝ちゃんの番組じゃねえか」

「お姉さんのヤス子さん。勝一郎君が前世のことを喋り出したのは、いつ頃のことですか」

「幼稚園へ上がる前の、五つの時」

「その時、どんなことを言っていましたか」

ヤス子は勝一郎にちらりと目をやり、また家族を見回してから、少しふてくされたように、

「ボクにはお嫁さんがいるって」

「お嫁さん?」

「それがね、逃げられたんだって、赤ん坊を置いて。だからね、その逃げたお嫁さんを、いつか見つけだして、仕返しするんだって。馬鹿みたい」

勝一郎は下を向いている。お婆さんは、ヤス子の皮肉な調子を、目でたしなめようとする。

「あんまりバカバカしくて、いやらしい話だから、みんなに言いふらしてやるって言ったの。そしたら、絶対このことは言わないでくれって、泣きそうになって頼むから、ずっと言わないでいたの。そしたら、まだまだ変な話をするの。ひどくいやらしいこと。あたしもう、勝ちちゃんとお風呂入るのやめたの。さっきも言ってたでしょう、お母ちゃんのお腹の中にいたなんて。どこで覚えてくるんだろうね、このエロがき。弟に持ってるだけで、恥ずかしくって」

「ええと、最後にお母さんとお婆さんにお聞きしますが、今の話の中のスキという人について、心当たりはありますか」

「まるでありません。親戚にも、知人にも、父ちゃんの方にも、心当たりはないんです」

「では、大阪の方へ、勝一郎君をつれて出かけたことは」

「一回もありません。関西の方には親戚もないんですよ。父ちゃんが出張するくらいです」

「お婆さんはどうですか」

「わたしも全然知りません」

お婆あさんは不意をつかれたように、少し慌てて答えた。

——どうです、ワカ子さん。あなたは勝一郎君の話信じますか。

——信じる。ん、でもまだ分からない。半分信じる。

——でも、次のフィルムで、あなたはそれを全面的に信じるほかはない。

——でも、その前にこちらをどうぞでしょ。

(3)

——さて、わがUFOテレビ取材班は、勝一郎君の画いた地図を手がかりに、大阪府城東区を訪れてみました。果たして、勝一郎君が前世に住んでいたという、スキ家は存在するのでしょうか。

駅のホーム。汚らしいローカル線の車輛が入る。インタヴューア一、扉から登場。マイクを手にして、

「こちら、S県から、はるばる大阪までやってまいりました。ここは大阪駅から、環状線京橋で乗り換えて二つ目、片町線ハナテン駅です。勝一郎君のハナテンは、この駅を指しているものと思われます。では、さっそく駅の外へ出てみましょう」

貧弱な駅前広場。突っきると、左右にささやかな商店街の並ぶ、幅の狭い通り。昼日中、車のほかには人通りもまばら。右手、近くの神社の祭礼でもあるらしく、夜店の準備。カメラは左手へ。

「勝一郎君の地図には、二箇所が目じるしがあります。駅と学校です。駅はハナテンとして、学校はどこでしょう。私たちはとりあえず、I小学校と見当をつけました。私たちは今、その小学校の方向へ歩いています。あっ、むこうから主婦の方がやってきます。ちょっとお伺いしてみましょう」

エキストラの主婦、買い物カゴをさげて近づく。

「今日は」

「はあ」

「ちょっとお訊ねしますが、この辺に、スキさんという家はありませんか。スキキュウゾウさん、あるいはスキタエさんといいますが」

「ああ、タエさんとなら、すぐその角です。キュウゾウさんは、もう亡くなっておらんがな」

「そうですか。どうもありがとうございます。さあ、いよいよ発見しました」

インタヴューアー興奮。玄関前に立つ。

「今日は」

「おう、開いてるぜ」

「失礼します、スキさんのお宅ですか」

「そう表札に出てるやろ」

「あなたは・・・どなたで」

「なに、人の家へ来て、どなたとはけったいな」

「いえ、打ち合わせにないもので・・・」

母親、外からあわてて玄関に飛びこむ。

「もう、みえてまんのか。買い物に手間どってましたんや。これは息子の省蔵です。西藏の弟です。時々、ふらっとやってきますのんや。さ、どうぞ」

カメラ、座敷の縁寄りに対座した、数奇タエとインタヴューアー映す。奥に寝そべった省蔵。

「息子さんの西藏さんについて、お聞きしたいのです」

「はい、どうぞ。なんでもお聞き下さい。あの子は可哀そうな子でした。生まれ変わったのも、あとに深い恨みを残したためです」

「ええっと、だいぶ予定が狂いましたなあ。まあ、いいか。それでは、タエさんは、息子の西藏さんの生まれ変わりを、お信じになっている」

「信じるも何も、その勝一郎という子が、自分は西藏だと言ってるんなら、それに間違いありませんやろ。あの子はろくな死に方しませんでした。きっと化けて出るでえって、あの時噂したもんやった。相手の女も、今はどこにいるか、知りまへんが、もしこのテレビ見とったら、ビツクラこいて、心臓麻痺起こしますやろ」

「えへん、それで西藏さんの亡くなったのは、いつ頃のことですか」

「あれは、もう七年前になりますかな。西藏が二十五の時やったな。大工やってましてな、高い所から落ちて、腰挫きましたんや。それから寝たきりで、起きれまへんのや。女房がいましたな。あんなん、いまじゃ家のもん思うていまへんのやけど、最初はよう面倒見とりました。そしたら、ある日、チクデンしましたんや」

「チクデン？」

「そうや。亭主と二歳の息子おいて、男と駆け落ちしくさった。それがよっぽどの気落ちやったんやな。動けないところに、胸悪くして、年の暮れに亡くなりました。女のことは、最後まで恨んでいました」

「はあ、それでは西藏さんの亡くなった時と、勝一郎君の生まれた時が、だいたい同じ頃ですな。正確に言うと、勝一郎君の生まれる一週間前に、西藏さんが亡くなっています」

「そらあ、きっと西藏に間違いありまへん。なんやまだ、女のことを言うてるそうやけど、もう昔のことはきっぱり忘れて、今度は幸せな人生を送ってほしい、そう言うてもらえまへんやろか。生まれ変わってまでも、人を恨むことはないって」

「お会いになりますか」

「そらあ、会いたいがな。会いたいけど、今は人の子や。あちら様にご迷惑かけてはいかんから、今は会わんとく」

(4)

「おい、さっきから聞いとれば、何の話しとるんや。生まれ変わりだとか何とか」
省蔵、むっくり身ををを起こして、インタヴューアの傍らに腰をすえる。

「これは、西藏さんの弟の省蔵さんでしたな。実は、あなたのお兄さんに関わることで、
・・・」

これこれ、こういう訳と説明する。(あとでフィルムは編集される。)

「こりゃ、傑作やで。兄やんが生まれ変わったか。姉やんに聞かせたら、蒼くなるでえ」

「おまえ、居所知つとんのか」

母親が訊く。

「知らん、知らんけど、面ろいことになったで」

省蔵は、あわてて打ち消した。

その時、玄関の戸が開く音がして、ただいまの声と一緒に、小学生、上履きの袋を振って姿を現わす。

「あっ、テレビのカメラ!」

嬉しそうに、縁側へ走りよる。

「おじさん、ボク映ってる」

「これ、邪魔するんじゃないよ」

タエの制止に、インタヴューア、

「いいんですよ。この少年が、西藏さんの息子さんですね」

「もう九つになります」

「坊や、お父さんを覚えているかい」

「知らない。でも、生まれ変わったんやろ。ボク、会いたいな」

「でもね、ボクよりも年下なんだよ」

「変なの。お父さんなのに、どうして年下なの」

「それはね、ボクより二年あとから生まれてきたから」

「ますます、変なの」

「それは君だけでなくてね、わたしたち大人も、変になりそうなんだけどね」

「それで、今度の父ちゃんも、やっぱりお腹に傷があるんの」

「えっ？」

「父ちゃん、セップクしたんやで」

「これ、そんなこと言うんやありまへん」

母親の制止に、省蔵笑って、

「あっは、子供は正直でいいや。母ちゃん、何も隠すことあらへんで。なまじっかの恨みでは、生まれ変わりはせんやろ。あんたさん、テレビ局のお兄さんよ。兄いはな、包丁で腹かっさばいたんやで。姉やんに逃げられたのが、よっぽどの屈辱だったんやな。もっとも、そんなことでびくつく、女ではなかろうが、あの女は。だけんど、今度のことは、やっぱ不気味やろな」

——スキサイズウに関して、意外な事実が明らかになりました。これはただの偶然の一致でしょうか。それとも、世の中には目に見えない、不思議な力が働いているのでしょうか。UFOテレビ取材班は、さらに新しい事実が解明され次第、皆さまにお伝えします。

(5)

<「夜見新聞」、某月某日の夕刊から>

ホステス投身自殺か

昨夜午後九時頃、都内×区×町桜マンションに住む、ホステス業梅咲子さん（30）は、十階マンションの屋上から、下の路面に飛び下り即死した。調べでは、咲子さんは、同じマンションの友人の部屋でテレビを見ている最中、突然部屋をとび出し、そのまま戻ってこなかったという。咲子さんは身寄りがなく、店では評判のよいホステスで、特に自殺の理由は見当たらないという。近く自分の店を開く予定であったが、それに関連して、資金面でのやり繰りがつかなかったのではないかと、店の同僚の話である。咲子さんの部屋からは、相当な額の預金通帳が見つまっている。

<同じく「夜見新聞」、その翌々日の夕刊から>

小学生行方不明

テレビで放映されたオカルト少年

昨日の午後、S県O市×町×番地、零場勝次さん（会社員）の長男勝一郎君（小学一年）は、学校から帰宅する途中、友達と別れたまま行方不明になった。夜になっても何の手がかりもないので、警察は誘拐と事故の両面から捜査に入った。帰り道が一緒だった友達の証言によると、勝一郎君は、別れた後で、突然姿が見えなくなったという。

勝一郎君は、先日UFOテレビの「これが特種だ!」で、前世を記憶している少年として放映されたばかりである。このテレビ番組と今度の行方不明とは、特に関係はないと思われるが、近所ではこの番組の影響で、神隠しとしての評判が広まっている。一部では、テレビ局もからんだ悪ふざけではないかとも見られているが、警察では事件として捜査に踏み切ったものである。なお零場さん方には、今の所脅迫に類するものは入っていない。

<同じく「夜見新聞」、某月某日朝刊>

行方不明の小学生帰る

オカルト少年勝一郎君

昨日の昼、×日午後以来行方不明になっていた、S県O市×町×番地零場勝次さん（会社員）の長男勝一郎君（七才）は、三日ぶりに突然家にもどって来た。発見された時は、行方不明になった時の服装のまま、家の門の前に一人でぼんやりと立っていた。名前を呼ばれても、最初は気がつかないほどであった。勝一郎君は、行方不明以来の記憶が、全くないということである。

近所では、神隠しにあった勝一郎君が、再び送り返されてきたというので、ちょっとしたオカルト騒ぎである。先に勝一郎君を番組で紹介した某テレビ局では、早くもこの事件をネタに番組を作り上げる模様である。そんなところから、事件全体がテレビ局の仕業ではないかと、かんぐる向きもある。

(6)

——今週の「これが特種だ!」は、前にこの番組で紹介し、前世を記憶する少年として話題をまいた、あの零場勝一郎君が再び登場します。二、三の新聞に報道されましたので、すでにご存知の方も多いかと思いますが、勝一郎君は、番組が放映された翌日の午後、不思議な失踪をとげました。友達の見ている前で、突然消えてしまったのです。それから二晩たった、お昼の同じ頃に、またふっと路上に現われました。この間、勝一郎君はどこへ行っていたのでしょうか。不思議ですなあ、ワカ子さん。

——不思議なあ。ゾクゾクしてくる。スタジオも、何となく冷えてません。

——省エネですからね。

——あたし靈感あるのかしら。何か起こりそう。

——それもそうです。今日は、零場勝一郎君とご家族の方に、わざわざスタジオまでおこし頂きました。みなさん、どうぞこちらへ。

勝一郎、母、姉入る。勝一郎を中に着席。

——早速ですが、行方不明事件以来、勝一郎君に、何か変わったことはありませんでしたか。

勝一郎、おびえた硬い表情をしている。母親答える。

——はい、お蔭さまで、もとの勝一郎に戻りました。帰ってきたときは、わたしの顔も分からなかったんですよ。何だか寝呆けてるようでした。すぐ布団に寝かしたんです。そしたら、次の日の昼まで寝ていました。あんまりよく眠るんで、もう醒めないんじゃないかと、わたし心配になりました。そしたら、お昼頃むっくり起きて、あれっ、どうして布団に寝てるんだろ、って言うんですよ。なんでも、今学校から帰ったばかりのつもりらしいんです。

——その間の記憶が、なくなってしまったんですね。

——はあ、自分がどこへ行っていたか、思い出せないんです。本人は、自分はちゃんと、学校からまっすぐ帰ってきたというんです。

——不思議ですねえ。勝一郎君、本当にどこへ行っていたか思い出せない。

——・・・知らない（蚊の鳴くような声）。

姉、口をとがらせて、

——きつとかっこいい車に乗せられて、遊びまわってたんだよ。恥ずかしいから、うそついてるんだ。いいな、テレビタレントみたいで。

——これヤス子、みっともないから、ひがむんじゃないよ。

——あたかもテレビ局に誘拐されたい。

——ええっと、内輪もめはそのぐらいにしてもらいまして、実はもうお一方、スタジオにおいて願っているんです。どうぞ、こちらへ。

数奇タエ現われる。

——わたしはいやや言うたんやが、どうしても出てくれ言うて、おがまれたもんやから。突然ですが、お邪魔さしてもらいます。

椅子に座る。

——はあ、これが倅の西藏でつか。小さくなりましたなあ。

——いいえ、これはわたしの息子の勝一郎です。

——はあ、そうでつか。これは失礼いたしました。はじめまして。わたし数奇タエもうします。

——わたくし、零場タカ子です。

——では、ご挨拶がおすみのところで、番組を進めさせてもらいます。先々週のこの番組を見られた方は、ご存知と思いますが、勝一郎君は、前世では、数奇タエさんの長男、数奇西藏さんでした。なんとも不思議なご対面です。勝一郎君は、前世のお母さんに、今出会っているわけですね。

勝一郎に、

——勝一郎君、この人を覚えてる、数奇タエさん。

勝一郎、おどおどした目を上げてタエを見る。かぶりを振る。

アシスタントのワカ子、

—そんなことないでしょ。君の前世のお母さんよ。

—でも、知らない。

—君は、前世ではこの女の人の子供だったのよ。

—ゼンセってなに。

—前世って、君の生まれる前の君。

—そんなの、知らない。

—だって、先々週の番組では、君は確かに、ボクはスキサイズウで、大阪に暮らしていたって言ったじゃないの。とぼけんなよ。

ワッ子ちゃん、だんだんムキになる。

—まあ、まあ、お姐ちゃん、落ちつきなはれ。

タエがなだめた。

—でも、あなたのことを知らないって言ってるんですよ。何ですかこの子は。

突然CMタイム。

—さて、ここで、勝一郎君の失踪した状況を、フィルムで再現しましたので、見てみましょう。

小学校。帰宅する児童。カメラ勝一郎の帰路をたどる。

—勝一郎君の家は、小学校から二十分ほどで、家のすぐ近くまで、近所のN君と一緒に帰りました。ここがN君と別れた十字路です。

道に小学生立つ。十字路の三方は畑、残りの角に住宅。

—君は勝一郎君と一緒に帰ってきたわけだけど、その時の様子話してもらえる。

—うん。ボクねえ、勝ちゃんどこまで一緒に来たの。ボクんちあっちだから、ここでグーバイしたの。

—君は右に曲って、勝ちゃんは真直ぐ行ったんだね。

—うん、そう。

—そうすると、間は畑だから、勝ちゃんの姿はよく見えるわけよね。

—うん、よく見てた。突然消えちゃったの。

—どういうふうに。

—突然、ふうっと。

—それでどうしたの。

—転んだんかと思った。勝ちゃんて呼んでみた。

—返事がなかったんだね。どのくらい離れてた。

—うん、別れてすぐ、二、三秒。

—戻ってみた。

—うん、戻ってみた。やっぱりいなかった。それでね、勝ちゃんち行って見たの。そしたら、

やっぱり帰ってないって。

——それで、勝ちちゃんが消えたとき、何かに気づかなかった。音とか、光とか。

——気づかなかった。

——まわりに誰かいた。車とか。

——誰もいない。車も通らなかつた。

再びスタジオ。

——こうして勝一郎君は、テレビの放映のあった次の日に、まっ昼間、路上で煙のようにかき消えてしまったのです。一体、何が起こったのでしょうかね。勝一郎君は、一切覚えていないのです。そして、翌々日に、ひょっこり自宅の前に姿を現わしました。その間、どこにいたのでしょうか。勝一郎君の失われた記憶に、世にも不思議な世界が隠されているのです。勝一郎君、こちらへいらっしゃい。

(7)

母親に押されて、勝一郎席を立つ。スタジオの、薄暗くしたコーナーに連れていかれる。黒マントの男、登場。

——ご紹介いたします。こちら、心理学者で、催眠術師の泉南雲先生です。催眠術によって、勝一郎君の失われた記憶を探り出してもらいます。勝一郎君、怖がることはないよ。先生、よろしくお願いします。

——オーライ。君が勝一郎君だね。すこし眠ってもらうだけなんだよ。ほら、こんなふうに関手を組んでごらん。人差し指を出してみて。そうそう、上手だね。じーっと指の間を見つめてごらん。ほら、だんだんくっついてくたろう。ほら、くっついた。今度はまぶたが重くなってくる。もう開けていられない。スリー、ツー、ワン、ゼロ。さあ、君のまぶたはもう開かない。そのまま眠ってしまおう。眠れよい子よ……。さあ、かかりました。

——これから、どうすんの。

——まあ、見てなさい。……勝一郎君、君はx月x日、つまり君がテレビに放映された次の日のことを思い出す。まず、朝起きてから、学校へ行くところだ。思い出したね。

勝一郎、うなずく。

——よろしい。では、今君は学校で勉強している。何をやってる。

——……。算数。

——よろしい。鐘が鳴った。算数は終わりだ。ええっ、面倒くさい、学校が終わったことにしよう。今君は、友達と校門を出て行く、そうだね。

勝一郎、こっくりとうなずく。

——友達とは、どんな話をした。

——いろんな話。

——途中で何かをやったかい。

——銭湯のぞいた。塀にふし穴があるの。

—うまいことをやったね。何か見えたかい。

—女の人が入ってた。

—きれいだったかい。

—裸だった。

—そりゃあそうさ、銭湯だもん。

—泉さん、脇道にそれないでよ。（ワツ子ちゃん小声で）

—わかってますよ。じゃ、銭湯はおしまいだ。君は、友達のN君と一緒に道を歩いていく。N君と別れる十字路が近づいてくる。見えるかい。

—見える。

—さあ、いよいよ肝心なところだ。N君がグーバイと言って、右に曲ったな。君はどうした。

—まっすぐ行った。

—何か見えるか。

—何も見えない。

—道が見えるだろう。

—真っ白で見えない。

—君はどうしてるんだ。

—歩いてる……。道がないけど、歩いてる……。

どこまで行っても、白一色だった。足の下には、固いものを踏んでいる感触がなかった。自分では歩いているつもりだったが、実は運ばれていたのかもしれない。勝一郎は、不思議と不安を覚えなかった。いつか来たことのあるような気のする、そんななつかしい世界だった。長いこと歩いていた。あるいは、ほんの一瞬のことだったのかもしれない。時の持続の感覚がなくなっていたので、どちらとも言い切れなかった。

だから、いつの間にか、となりに白鬚の老人が、並んで歩いているのに気づいたときも、それは一年後のようでもあり、また数分後のことのようにも思えた。老人は、カーテンのように長い、白地の服をまとっていた。そして、勝一郎の手を引いていた。引っぱられているという感覚がないので、やはり二人は歩いているというよりも、飛んでいたのにちがいない。

ふいに、厚い雲の中へ入ったように、あたりがもやもやして、勝手な気流に白い空間が揺さぶられているようだった。が、ほどなくして、勝一郎と老人は、その厚い雲の層をぬけ、布団綿のような上に立っていた。そして、傍らに立っているのと同じ資格好をした老人が、前方から近づいてきた。老人は、老人に向かって言った。

<お役目、ご苦労でしたな>

<ふう、同じ人間を二度も手引きするなんて、近頃はない事故ですな。やっぱり報告せにやなりませんか。俸給カットなんぞやられたら、たまりませんですな>

<なあに、あちらも近頃はルーズだから、今回は黙っていきましょうや>

<そうしましょう>

<それじゃ、証拠品を片づけましょうか>

老人の一人が、雲の塊りを無雑作にちぎり、バスケットボールぐらいに丸める。

<坊や、こっちおいで>

勝一郎の中で、何かが震えた。だが、老人の言葉には逆らえなかった。それに、勝一郎は、自分は何も恐れる理由のないことを知っていた。老人に催促されるまでもなく、誘われた方へ歩んだ。雲のボールを製造した老人は、それを両手にはさんで、勝一郎の前に突きだした。

<この中にお入り>

どうしてそんな小さなものの中に入れるのだろうか、と思ういとまもなく、勝一郎はするするとボールの中をくぐっていた。気がつくやうに、通りぬけていた。老人は、手にしたボールを雲の上に置いた。ボールには顔があった。知らない男の顔だった。勝一郎は、傍らにぼんやり立って、それを見下ろしていた。

(8)

<さて、こちらが勝一郎、こちらが西藏だな>

老人は顔のあるボールと、勝一郎を見較べながら言った。

<間違えないようにせんと。こちらは送り返して、こちらは消す方だから>

<おい、どっちが消す方やて>

顔のあるボールが言った。

<もちろん、君、西藏君だよ>

<何でや、何でわいだけ消されるんや。このけったくその悪い、ボールの方にしてくれや>

<君だって、ほかから見れば、ボールみたいなもんだよ。自分では、五体そろってると思いこんでるがね。地上での習慣が、脱けきれないんだな>

<ボールでも何でもいいから、わいを戻してくれ。わいには、まだ、せにやならんことがあるんや>

<君は一度生きた人間だ。一度生きれば、ここへ来て、皆消去されることになっているんだ。君がまた地上に戻ったのは、まったくの事故だったのだ。めったにないことなんだがね。君は完全に消去されなかった。だから、この勝一郎君の中で、“再生”されてしまったわけなのだ。というよりも、二重録音と言ったほうが解りやすいかな。普通、録音されたものに更に録音すれば、前のものは消えることになるんだが、魂の場合はそう単純ではないのでな。いったんここで完全消去されてから、再び地上で使われるのだ>

<それやったら、わいの魂はどこにあるんや>

<君の魂は、君の独占物ではないよ。魂は何回も使われるんだ。なにしろここでは、ストックが足りないからね。誰でも一回限り、魂を楽しむことが許されているんだよ。使用期間が終わったら、返却してもらおうのだ>

<魂を離れたわいは、どこへ行くんや>

<魂を離れたら、もちろん、君は存在しませんよ>

<いやや、いやや、わいは死ぬのいやや>

<君はもう、死んでるんだよ>

<死んでも、何でも、魂から離れるのはいやや>

<どうしてそんなに、魂にこだわるんだね。魂なんてないほうが、気楽でいって人が、沢山いるんだよ>

<とにかく、いやや。あんた何者だい。神様か。神様がそんな残酷なこと、言うわけがない。きっと、わいの魂をとって食おうという、鬼かなんかにちがいない>

<わたしらは、君らから見れば神様のようなもんだが、ここではセンサー（検閲官）と呼ばれているよ。魂がちゃんと消去されたかどうか、見張るのが役目なんだ。暇な仕事だから、わたしら老人が務めることになっている。だが、あんたは少し質問しすぎるよ。うかうか話しのつたわたしのほうも悪いが、たいがいの魂は何も考えずに、大人しく消されていくもんだ。あんたは、よっぽど未練を残しているとみえる。最初の時も、真っ直ぐここへ来ずに、下のほうでうろろしてるもんだから、わたしが手を引かねばならなかった。今では魂は貴重品なのだから、一つでも迷われると困るんだ。人口が増えたせいで、需要が多いからね>

<お願いします、どうか消さないでください>

<そう言われても、わたしらにはその権限はないしな。君をそのまま地上へ帰すわけにはいかんのだよ>

<地上へ帰らなくても、よろしゅうございます。魂だけ、とっておいてくだされば>

<そうだな、一つだけ方法がある。めったにないことだが、魂に記録されたものを、消さずに保存しておくこともある。その場合も、わたしらには選ぶ権限がない。みんな上からの指示でな。上から、これこれの魂をのけておいてくれといえ、わたしらはそれには手を触れない。近頃はとんとないことだが。なにしろ、あの方のお眼鏡にかなうには、よっぽどの内容でないとな>

<その方は、どういうものがお好みなんで>

<さあね、わたしら下々には、あの方の趣味は解らんよ。古いところでは、ゴータマ、お釈迦様じゃな。それから、ホメロス、石川ゴエモン、楊貴妃。それから、ナザレの大工の息子で、イエス・・・>

<わたしも大工なんです>

<そうか、それは見込みありそうだな。しかし、大工で保存されたのは、これまでその方だけだからな。とにかく、とっぴようしもない人生でないと、あの方の興味を引かないらしい。かと思うと、まるでとりのない人間の人生を選ばれたりする。どうやら無作為で、時々サンプルをとることもあるようだ>

<わたしなどはダメでしょうか>

<そうだな、魂のからくりについて、余計なことを喋りすぎた責任もあることだし、一応あの方にお伺いを立ててみるか>

老人は、もう一人の老人の方へ向き直った。

<そういうわけじゃ。あなたには、勝一郎を地上まで送り届けてもらいましょう。わたしは西蔵をつれて、あの方の所へ行ってみよう。（小声で）どうせ無駄だろうがな>

西藏と老人は上へ向かい、勝一郎ともう一人の老人は下へ向かった。西藏と老人がしばらく行くと、無慮無数の魂が、静々と流れていく川のほとりに出た。かつては西藏も、この中の一人であった。足を止めて、もの珍しげに見ている西藏を、老人はうながさなかった。気を変えて、この中へ飛びこんでくれれば、手間は省けるのだ。

白い綿の塊りのような魂のおもてには、様々な顔が描かれていた。人間ばかりではない。猿もいた。虎もいた。海豚もいた。下等な動物ほど、顔はすみやかに消えていった。最後までしぶとく残るのは、人間の顔だった。中には、岸辺に立つ西藏を、恨めし気に見ていくものもいた。西藏は何を見たのか、あっ！と声を上げた。

<咲子、咲子じゃないか>

女の顔が、西藏に気づかないままに、近くを過ぎていく。西藏は、思わず体をのり出した。次の瞬間、ほかの魂と一緒に流れていた。流れは思うままにならなかったが、西藏は懸命に女の魂に近寄った。

<咲子、待ってくれ。わいを忘れたか>

<あんた、あほやねえ。ここへ来たら消されちゃうんやで>

<おまえが消されるんなら、わいだけ残ってもしやあないわ。復讐できやへん>

<執念深い人やなあ。あんたのそこが嫌いやったんや。わたの消えるのが、そんなに見たいか>

<いや、もう恨むのなんかあほらしゅうなった。ほんまやで。人間がみんな、こんなふう消されちゃうんやったら、腹も立たんようになった。わいが飛びこんだのも、恨みやないで。おまえの顔見たら、急に懐かしゅうなってな。みんなこんなふう消されていくのに、わい一人だけ残ろうちゅう根性が、恥ずかしゅうなったんや>

<そやけど、わてあんたに謝らへんで>

<勝手にせえ>

<あたしら悪い因果なんや。知り合うてはならんかったんや>

<もう言わんとけ。わしら生まれ変わるんや。この川で清められてな。あの爺いらがなんと言おうと、これはわいらの魂やで。わいらがここで出会うたのも、今度こそは来世で・・・>

つかず離れずしながら、ふと横を見ると、女の顔はすでに消えていた。

<おい、お咲、お咲・・・わいを・・・>

真っ白い綿菓子のような魂のボールが、無慮無数ひしめき合う川を眺めて、さっきから西藏の行方を見送っていた老人は、西藏の顔が最後まで一つ残って、それからふいに消えるのを見届けると、満足したようにうなずいて、下へ降り始めた。

(10)

——何か見えるかい。

——・・・真っ白・・・。

——真っ白ばかりでは、しょうがないんだよ。

——・・・・・・・・。

——今、どうしてるんだい。

——歩いてる。

——歩いてるだけかい。いいかげん、どこかへ出ないかい。

——・・・見えてきた。

——何が。

——ボクんちの門。

——なんだい、それじゃ、どこへも寄らなかったのかい。ただ真っ白ばかりで。

——お母ちゃんが出てきた。

——もういいんだよ。いいかい、三つ数えたら覚めるよ。一、二、三。ハイ、お目覚め。

——ええ、オカルト研究家の胡淋さんにおいで頂きましたので、今の催眠術の結果について、うかがってみましょう。胡淋さん、いかがでしたか。

——ゲホ、ゲホ・・・そうですね、大変意味深い結果でした。つまり、何の結果も出なかったことですが、ゲホ、これは大変な結果です。勝一郎君は、何ものかによって、記憶を消されてしまったのです。ゲホ、昔から生まれたばかりの魂は、何も文字の書かれていない白紙に例えられています。ゲホ・・・言ってみれば、勝一郎君は、ゲホ・・・、録音テープの一部が消されるように、ゲホ・・・、記憶の一部を消去されてしまったのです。ゲホ・・・ええい、まとめて、ゲホ、ゲホ、ゲホ・・・フゥー。

——勝一郎君の見た、白い世界はなんだったのでしょうか。

——だから、それが白紙の世界なんですよ。どこまでいったって白紙なんです。最後に家の門が見えてきた所から、また記憶が始まるんです。

——勝一郎君の記憶を消したのは、誰なのでしょう。

——さあ、そこまではね。ゲホ・・・いろいろ考えられるでしょう。UFO、ゲホ・・・その外、異次元の存在、ゲホ・・・、とにかく、人知を超えた何ものかにはちがいありません。ゲホ、ゲホ・・・。

——ありがとうございました。喘息だそうですが、お大事に。

(完)

